

2023年8月の総評：木下龍也

## 栓抜きの音だけがする夏季休暇／合川秋穂

閉塞感と解放感の狭間に置かれたような句だ。「栓抜きの音だけがする」ということは蝉の鳴き声すら届かない一室で、室内にも物音を立てるような存在はいないということだろう。そのことについて主体がどう思っているのかは書かれていないから、「栓抜きの音」の周辺にある無音や孤独をどう捉えるかは読者に任されている。例えば「夏期休暇」を夏休みと呼んでいたあの頃のわくわく感は消え失せ、今はただひとり、ビールを飲んでいて、それ以外に何もしていない。と受け取ることもできれば、社会の喧騒から離れて、しゅぽんという気持ちのいい「音だけ」を聞ける幸せ、と受ける取ることもできる。どちらにせよ主体はきっと無表情で、読者がどう光を当ててるかによって笑っているようにも泣いているようにも見える句なのだと思う。この平熱な雰囲気惹かれた。

## カーテンは一行目から空を知る／常田瑛子

「一行目」とは文章の書き出しだ。これから何行と続いて行く物語の始まりである。そこには「空」についての記述や描写があるようだ。この物語を書いているのは誰なのだろう。「カーテン」が「カーテン」自身の生涯を記述した自伝の「一行目」と読むこともできそうだが、そうすると「空を知る」のは製造や販売を経た第二章あたりからになりそうだ。だからこの「一行目」を書いているのはおそらく、「カーテン」を擬人化し「カーテンは一行目から空を知る」と決めることのできる作者なのだろう。新しい部屋の窓に「カーテン」を吊るす。そのとき初めて「カーテン」は太陽光や月明かりを遮るという「カーテン」としての役割を始める。自分が何のために生まれたのか、を「カーテン」はそのとき初めて「知る」、という物語を生み出しているのだ。その想像力が素晴らしい。

## クルトンの連帯感の食べごろに／松下誠一

スープの浮き実である「クルトン」。スープに浮かんで間もないカリカリの状態を好む人もいれば、スープに浸りきったジュークジュークの状態を好む人もいるだろう。「クルトン」自体に決まった「食べごろ」は（おそらく）なく、どの状態を「食べごろ」と捉えるかは人それぞれである。パッと散りばめられた数粒は、同時にスープへ着水し、人それぞれの「食べごろ」を同時に迎える。我々が勝手に決めたゴールに向かって、一粒一粒が状態を変化させていく。言われてみれば、たしかにそこには「連帯感」がある。発見と納得のある句であり、「クルトン」をこれまで以上に愛おしい存在にしてくれる句でもある。

小の字を

昨日と同じ

小にする／桜咲

手書きの文字は意識しても微妙に変化してしまう。あれはうまく書けたのにこれはなんか変になっちゃった、ということが度々ある。筆跡鑑定があるのだから、手書き文字には人それぞれに一貫性や癖があるのだろうが、それでも同一の字を「同じ」形に書くのは難しい。というか、きれいに書こうと思ったことはあっても、「昨日と同じ」形に書こうと思ったことはない。だから、「昨日と同じ小にする」と決意する、とはどういう気持ちなんだろう、と考えてみた。おそらく「昨日と同じ小にする」というのは、日々変わりゆく世界や自分へ下ろす礎のようなものなのではないだろうか。これだけは変化させない、という祈りのような。選ぶ漢字としても「小」は最適だと思う。たったひとつ、小さくてもいいから、軸を持ちたい、中心点がほしい。そんな思いを切迫感とともに表現できている。

## 幼子は水をこぼしてばかりいる 地球は水の惑星だから／貴田雄介

「水をこぼす」というのは褒められることではなく、それをしているのが「幼子」であれば仕方がないのだが、「ばかりいる」ならそうさせないようにしなければならぬ。と第三者である僕は考えてしまうのだが、主体は「地球は水の惑星だから」という壮大な視野でその行為を優しく受け止めている。たしかに「地球」の面積の約3割が陸で、約7割が海だ。水のないところのほうが少ない。遠くから見ればほぼ「水」である。そんな場所のたまたま濡れていないところがちょっと濡れたくらいでなんだったよ、という頓知的なユーモアも感じられる。視野の広さは余裕を生み、余裕は優しさやユーモアを生む。この視野のなかで「幼子」はきつとのびのびと育っていくのだろう。

## 妹がきずついたとき僕もまた シャーペンの芯折れてたりする／うたた

双子がシンクロするというのは不思議な話としてたまに聞く。生まれたときから一緒にいて、育つ環境が同じであれば、行動や思考が似るだろうから、その結果と推測できそうな話もあるし、真偽は不明だがその範疇を超えていそうな話もある。例えば、双子の姉の腕に激痛が走り、見てみると何か針が刺さったような跡があり出血している。不思議に思いながら家に帰ってみると妹の腕に献血の跡があった、という話である。奇妙なシンクロだ。そして、この歌の兄妹も、双子なのかは不明だが、奇妙にシンクロしている。「きずついた」というのが心なのか身体なのかはわからないが、「妹」は直接その「きず」を受けていて、「僕」は直接ではなく「シャーペンの芯が折れ」という間接的なダメージを受けている。「たりする」と書かれてあるから、「妹がきずついたとき」「シャーペンの芯」以外の身の回りの物が不具合を起こした、という経験があるのだろう。妹と兄における直接／間接の差は、もしかしたら双子ではないゆえの差かもしれない。双子ほどの強いつながりはないが、ゆるやかにつながっているということだ。こういう話はなかなか人に話せないだろう。勘違いじゃないですか？と言われて終わってしまうだろうから、話したくもないかもしれない。だからこそ短歌にしておく意味があると思う。なか

ったことにしないためにも、なかったこととして自分が諦めてしまわないためにも。

## 信号を諦める距離がおんなじで 走らなくてもいいんだって思う／高砂明日香

渡ろうとしている横断歩道の信号機の青が点滅を始める。走り出すが、もう間に合わないが見限って、走るのをやめる。日常にはありふれているシーンだが、どの程度の「距離」で渡れないと見限るかは人それぞれに差がある。全然見限らずに突っ込んでいくタイプの人に同行しているならば、こちらもそれに合わせて「走らな」ければならない。主体も、ある人とはそうだったのだろう。合わせている、と感じもしないくらい日常にはありふれている些細な差だ。けれど、その「距離がおんなじ」この人と出会って、ああ無理をしていたのかもしれない、と思う。合わせてくれる人ではなく、たまたま「おんなじ」人だから申し訳なさも感じない。自然体でいられる。自分では気づきもしなかった心の緊張がふっとほどける。そんな瞬間を捉えた一首だ。ちなみに僕はどんなに急いでいても走り出さない。

## AIは シートベルトの着用を求めた 助手席のスイカにも／和泉次郎

おそらく重さやシートに何かがあるという把握の仕方で行判断しているのだろう。あきらかに人ではないもの「にも」安全を促すかわいい「AI」。あるいは、それが人間ではなく「スイカ」であることは承知で、急ブレーキの際に落下し、「スイカ」がダメージを受ける未来を予測して安全を促すかしこい「AI」。ちょっと怖いなど感じるのは、状況が変われば前者であっても後者であっても人に牙を剥く存在になりうるからだろう。前者は、異なるふたつのものを曖昧な把握によって同じカテゴリに振り分けて同一の指示をしている。極端な話だが、ゴミ焼却場にこの「AI」があれば、人間もゴミと判断し燃やしてしまうかもしれない。見えてなさすぎるのだ。後者は逆に見えすぎている。これも極端だが、この「AI」が地球の安全にとって人間は害悪と予見すれば、我々は処分されてしまうかもしれない。遅効性の恐怖が仕込まれた一首。

## あまりにも多い子どもを 詰めこんだ車から はみだしたひだりて／井口可奈

「あまりにも多い」とは何人か。その「子ども」たちは生きていいのか死んでいるのか。どんな目的で「詰めこんだ」のか。「車」はワンボックスワゴンなのか、セダンなのか、軽自動車なのか。明るい想像をしてみるなら、大家族の旅行。暗い想像をしてみるなら、拉致や遺体遺棄。文脈も前後もなく、ひとつの確定した絵もないため、それらは読者で想像するしかない。作者はそれを理解したうえで言葉を

選んでいる。たまたま生まれたのではなく、意図してつくられた余白は鏡として機能し、しっかりと読者を映す。「はみだしたひだりて」から腕、肩、顔と視線を移してみたとき、その「こども」は、どんな表情をしているだろう。そして、「車」の窓に映るあなたはどんな表情をしているだろう。

## 人生受け入れたもん勝ち 一回入れて嫌なら出す／梶川文恵

「人生受け入れたもん勝ち」というのは巷に溢れている言葉かもしれない。そういう意味合いのタイトルを持つ自己啓発本もありそうだ。不遇も不運も「受け入れ」なさい、みたいな。そこからがスタートですよ、みたいな。ものすごく小さい声で諦めろ、と言われているようで、個人的にはそういう本は手に取ったことがないため、「人生受け入れたもん勝ち」で終わっていたら素通りしていたかもしれない。驚いたのは「一回入れて嫌なら出す」だ。強い。ガハハ、って笑ってくれそうな感じだ。その場から逃げろ、というのではない。主体は変わらずそこに立っている。思い返せば僕も、子どもの頃はそうだった。食べなさいと言われたお刺身を口に含み、まずいという理由で吐き出していた。大人になると、周りの目を気にして、そういうことはできなくなる。でも、食べ物でなく、苦しみや悲しみならば一度「受け入れ」たとしても、ずっと抱えていたり、飲み込まなくてもいいのだ。まずいと思ったら吐いていい。「一回入れて嫌なら出す」。この言葉はしばらくお守りとして頭のなかに置いておきたい。

以上です。8月は夏休みもあってかご投稿がたくさんあり、読み応えがありました。ありがとうございます。9月のご投稿も楽しみにしております。

木下龍也